



読売俳壇



矢島 渚男 選

三ツ星の店のメニューに田螺あり

【評】三ツ星マークは料理店の格付けで最上とされるが、その店のメニューに田螺があった。私など農家で食べた田螺汁がパリのエスカルゴより美味だった。美味は経験的・主観的なもの。普遍的なものではない。立春や横波ひろげ九十九里

【評】沖からの波でなく海岸線に沿って広がるという把握が優れている。陸には菜の花が咲いているだろう。春だ。

形而下のことばかりにて冬ごもり

【評】形而下は難しい言葉だが、平凡で退屈な暮らしが続いている日常の生活。これも主観的な感想かも知みどりこの目覚めのような梅一輪

豆を撒く人にもなれず老いにけり

【カゼヒクヨ】妻を代弁するインコ

炊き出しの熱き豚汁春の雪

男は青女は胸に春愁

風花や石と会話の穴太衆

余呉いまも続ける寒の糸作り

吹田市 前田 尚夫

高野ムツ才 選

冬蝶のペランダまで来死にけり

【評】衰えた冬の蝶がペランダで死に絶えていたというありふれた場面。だが、「まで来」との擬人表現が、秋の野を飛び回っていた頃の蝶の姿まで彷彿させる。

凍豆腐ふにゃらほにゃらと噛みしめる

【評】煮しめの凍豆腐。独特の歯触り、舌触り。噛むと煮汁の旨みが口に広がる。弾むような擬音が凍豆腐の美味しさを倍増する。

石鹼玉いづつも消える自由あり

【評】石鹼玉が青空で弾けるのは、風のせいでも形を保てなくなるからでもない。石鹼玉の意志を感じた。飛ぶのも消えるのも自由な世界。山焼の始めは神の呪文かな

ふるさこの冬山低しそれがよし

春やこの我も走りし運動場

土筆土筆よ大川小の鳴呼跡地

春光のかたまりとなり猫眠る

一丁の鉦光らせて狩の宿

新しき靴踊りたる犬ふぐり

高知市 加田 紗智

正木ゆう子 選

竜天に昇る危険な宇宙ごみ

【評】春の季語「竜天に昇る」の竜は、今や宇宙ごみの隙間を縫って昇らねばならない。想像上の聖なる竜と、現実の宇宙ごみが、笑えないリアルさで取り合わせられた。

変顔で振り向きバレンタインデー

【評】待ち合せ場所で恋人に声をかけると、振り向いた顔が、変顔。笑わせようと待ち構えていたのだ。変顔も愛情表現の大切なツール。

図書カードだけが知る恋卒業す

【評】図書室で見かけるだけの片思い。或いは憧れの司書。本について語りあふ友。学生生活の中で、図書館は、秘めやかな初恋のステージ。どこ見ても妻の映らぬ初鏡

沢の音蕭条として木の根間く

身を立って餌を欲る魚や水温む

豹柄の相手虎柄猫の恋

「又ね」といふやさしき言葉冬夕焼

卒業の子と東京の星を仰ぐ

二千年の紅の森や鳥雲に

龍ヶ崎市 小宮 光司

小澤 實 選

小包の隅に切干匂いたる

【評】いただいた小包の隅に切干大根が入っていて、開けたとたんによく匂った。この切干は、送り手自作のものだろうと想像する。他にも手の込んだものが入っているそう。

ヘルメットかじかも両手添え脱げず

【評】ヘルメットを脱ぐうとしているが、両手がかじかんでいて脱げない。動詞の多さによっても、そのもどかしさが伝わってくるようだ。

特攻に「熱望」「望」「否」牙返る

【評】先の大戦の特攻である。命令ではなく、搭乗員が希望を選択し出願するかたちで行われたことがあったか。選択も苦しかったろう。

本堂の厚き雪庇や僧の恋

砂ぬきの貝の音聞く臍かな

あたたかや耳大いなる新羅仏

揉み込んでヘアートニックや春寒し

投げ上げて伸ばすビザ生地風光る

ソース派と醬油派があて牡蠣フライ

散歩する老人ふくろに子猫

甲府市 村田 一広

枝しおり 折

木下龍也著「すごい短歌部」文芸誌「群像」の連載「群像短歌部」の第12回を単行本化。「夏」ゆがむ」など毎回お題を出して著者が投稿歌を選歌・講評し、自らも競作。ふるむんと満月をよぶふるむんとふるむんとってせかいがゆがむ 高山准 (講談社、1760円)

林祐一著「Curriculum Vitae / ポリクリノート」 かりん賞、かりん力作賞を受賞した歌人にして医師の第1歌集。医学部生だった19歳から30年間に詠んだ450首が、一人の医師の人生行路を照らす。「ポリクリ」は「臨床実習」の意。へどこにでも死はあるようでききうで今日もあなたを捕まえておく (KADOKAWA、2860円)

福本弘明著「梨の木」 現代俳句協会副会長の著者による第4句集。2010〜24年に詠んだ250句を選んだ。△還暦の少年梨の木を植える (文学の森、2200円)



題字デザイン・イラスト 福田美蘭